

## 第2回「道史編さんに関する有識者懇談会」議事録

日時：平成29年8月2日（水）14:00～15:00

場所：ホテルポールスター札幌 4階「ラベンダー」

### 【出席者】

#### <委員>

桑原委員、坂下委員、横井委員、山崎委員、小内委員、柴田委員、富田委員、北野委員、小川委員、辻副知事（座長）

#### <事務局>

（北海道）成田法務・法人局長、角張文書館長、鶴原首席文書専門員、阿部主幹

### 成田法務・法人局長

それでは、只今から第2回道史編さんに関する有識者懇談会を開催させていただきます。開会に当たりまして、主催者を代表いたしまして、辻副知事からご挨拶いたします。

### 辻副知事

副知事の辻でございます。本日はご多忙中のところ、また、この暑さにもかかわらず、ご出席を賜りまして、本当にありがとうございます。前回の有識者懇談会には、急な用務が入りまして、残念ながら出席できませんでしたが、皆様からは、大変有意義なご意見を頂戴し、改めてお礼申し上げます。ご案内のとおり、来年度は北海道命名150年の節目を迎えるところでありまして、その中で道史の編さんは、北海道の姿を見つめ直し、そして歴史や芸術文化など、先人から受け継いだ財産を次の世代に継承する重要な役割を担うものであり、既に様々な方々から関心をお寄せいただいているところでございます。

第2回目になります本日の懇談会におきましては、前回皆様からいただきましたご意見を基に、北海道としての検討案をお示しいたしますので、更なるご提言等をいただき、方向性を見いだしていきたいと考えております。どうか本日お集まりの皆様におかれましては、引き続き忌憚のないご意見を賜りたいと存じますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

### 成田法務・法人局長

本日の出席者についてであります。白木沢委員、瀬尾委員、伊藤委員、杉山委員におかれましては欠席となっております。

ここから座長の辻副知事が進行いたします。

### 辻座長

それでは、次第に沿って進めて参ります。本日の議題としましては主に2点、「道史の構成」と「道史編さん大綱（素案）」をあげております。前回の懇談会では、構成に関することが議論の中心になっておりました。この構成の部分の方向性が定まりませんと、他の部分もなかなか決まらないということがありますので、先に「道史の構成」をご審議いただきまして、その後、編さん大綱全体へ、という順番で進めさせていただきます。それでは、議事1「道史の構成」につきまして事務局から説明いたします。

### 鶴原首席文書専門員

前回の懇談会では、「新北海道史」の続編として1970年以降を対象とするという案と、団体からの要望を踏まえた案、これは1945年以降まで遡る、そのほかに普及版全通史と

年表を作るという案の、2つをお示ししていました。これに対しまして、「新北海道史」の戦後は非常に不十分なので、戦後をきちんと書くべきというご意見、あるいは、ものによっては第一次大戦あたりまで遡った方がよいというご意見、さらには通史編の中で先史時代から叙述し直すべきというご意見もいただきました。

資料1をご覧ください。今回改めて検討案として出しておりますのは、前回の「要望を踏まえた案」をベースに、若干ふくらませつつ、中身を具体化したものです。道としましては様々な制約がある中で、実現可能な範囲内で、最低限、今やらなければならない事は何か、道民の皆さんに喜んでもらえるものは何か、という観点で組み立てた案です。

まず、編さんの中心となる1945年以降の部分については、仮に「北海道現代史」と付けています。「新北海道史」第6巻で既に扱った時期も対象範囲に含めておりまして、「新北海道史」とは別のものという位置づけを、この名前でも明確にしたいと思えます。現代史ということについては、前回の懇談会で、既に戦後史は外国人留学生の歴史研究の対象にもなっている、というお話がありました。また10年後には戦後82年ですから、ほとんどの道民にとって戦後史は人生に重なるわけで、自らの人生を振り返るための現代史、ということも言えるかと思えます。

「北海道現代史」のまず通史編ですが、前回の懇談会では1巻の案としていましたが、1冊に全分野が盛り込まれると1分野が薄くなるのではというご指摘を踏まえ、「新北海道史」並みの細かさで書くならば2巻、としております。また、戦後からすばっと区切りにくいというご意見もありましたので、一応の区切りとしては戦後ですが、事象によっては戦中・戦前まで遡って叙述することも書き加えています。

資料編は分野別に3巻作る案になっております。新たな資料を発掘し、保存していく意義も含め資料編を重視する構成になっています。3巻の内訳は、「政治・行政」、「産業・経済」、「社会・教育・文化」となっておりまして、これは次の頁の資料2「他県の現代史部分の構成」を参考に、一般的な分類の仕方で一応置いております。なお、前回の懇談会では、資料編はきちんとというご意見と、少なくとも良いのではというご意見とがございました。資料編をどう評価するかというのが、全体構成を考える上で重要であると思えますので、資料編がどんなものか、すでに十分ご存知の方もいらっしゃると思いますが、ここで千葉県史の例をあげて少しご説明させていただきます。

千葉県史、「千葉県の歴史」という表題で出されていて、平成20年に全51巻を刊行して編さんを終えています。そのうち戦後の現代史は、通史編1巻と資料編3巻の構成になっています。資料ですが、資料3の次に、A4と二つ折りになったA3が対になってホチキスで綴じられているものが3部あります。このうち一つ目のA4の資料、右端に「二 戦争被害とその救済」とある紙をご覧いただきたいのですが、これは千葉県史の通史編の一部、約2頁分です。手書きで①から④まで傍線を引いておりまして、①では「戦災復興並びに同胞援護事業資金募集趣意書」によると、千葉県の戦災の状況はこうでした、という叙述になっております。続いて②のところでは、「ソ連占領下将兵居留民帰還促進運動に関する件」と題する通達によると、ソ連やマッカーサーに陳情をするように指示されたと書いてあります。③④も同じように出典を示して叙述する格好になっています。めくっていただきまして、その下のA3の紙を開いていただきたいのですが、これは千葉県史の資料編、政治・行政編の一部を切り貼りしたもので、資料ごとに1段ずつ、4つの資料を載せていますが、これは通史編で引用した、資料①から④の原本資料です。つまり、通史編と資料編が対応しているので、通史編でさらっと読むだけでもいいですし、もっと知りたければ資料編で直に資料を読んで詳しく知ることができますし、資料編には別に解説もたくさん付いておりますので、資料編だけでも面白く読むことができます。資料編には、1巻当たりこういった小間切れの資料が400から500も載っておりまして、それぞれの資料の背景や意味するところの解説に助けられて、研究者ではなくても、通史の叙述

の根拠を知ることができます。加えて、歴史資料を読む醍醐味や、当時の空気感みたいなものを味わうこともできる仕掛けになっています。一昔前までの資料編は、使いこなせるのは研究者だけと言われていましたが、だいぶ趣が違ってきていると言えます。また現代史は、資料が古文書ではないので読み易いですから、こうした資料編を楽しめる層も多いと思います。ちなみに、こういった資料を使っているかという、それぞれの資料の左端に括弧書きで出典が書いてありまして、千葉県文書館が所蔵する旧役場の公文書などであることが書いてあります。

次の資料、これは千葉県らしい資料ですが、「醤油醸造業の復興」を書いた通史編の一部です。占領期に大豆が手に入らないので、大豆を使わない醤油を作っていた、という叙述なのですが、めくっていただいて対応する資料編はというと、これは産業・経済編ですが、代用醤油の作り方、成分の割合なんか書いてある資料が載っています。左端の出典を見ますと、ヤマサ醤油株式会社、キッコーマン醤油株式会社といった民間企業の資料を使っています。

最後の3つめは、農村の生活改善運動を叙述した部分の通史編です。台所やかまどを改善することで、食生活や家事労働を変えていまいしょうという動きがあったことが書かれているのですが、これに対応する資料編、社会・教育・文化編を見ますと、上から「農民とともに」と題する生活改善普及員の手記があったり、改良かまどの作り方の図があったり、中ほどの4枚の写真は、台所の改善を勧めるスライド映画の中のコマから取ったものです。

こういった多彩な資料を、資料の性格や時代背景の解説と一緒に載せているのが資料編です。縮小コピーしているので読みづらいかもかもしれませんが、だいたい資料編の雰囲気、通史編との関連といったものがお分かりいただけるのではないかと思います。もちろん、今どきの県史はこういう形が多いというだけですので、必ずしもこの形を踏襲しなければならないということではありません。資料編をしっかりと作ると全体としてこういう重層的な現代史になるという、一つの例としてご紹介いたしました。こうした資料編は、前回ご指摘にもありましたように、手間がかかるということは間違いありません。それでも、散逸しやすい資料を残していくという役割なども考えますと、自治体がやらなければならない作業であろうと思いますが、如何でしょうか。資料編を重視するかどうかは、これから検討いただく編さん大綱の中の編さん方針にも関係することですので、今一度しっかりご議論いただきたいと思います。

再び資料1に戻りまして、次の「概説 北海道史」の部分です。前回は「普及版全通史」と呼んでいましたが、今回はよりイメージしやすい仮の名前として「概説 北海道史」と付けてみました。先史時代から現代までを対象に「新北海道史」以降の研究成果を盛り込んで新たな史観で叙述するものです。「新北海道史」から40年近く経って、相当な書き直しが必要というご意見は、団体からの要望、それから前回の懇談会の中でも多くご意見をいただいております。本来ならば全体を編さんし直すべき時期にあるのかもしれませんが、その代わりという位置付けで、ここは是非しっかりと、学術的にも有益でありかつ一般道民にも親しみやすいものを作るという提案です。一般道民が理解しやすい構成上の工夫例として、通史型・トピック型・資料提示型と書きましたが、これらを組み合わせた構成も考えられるかと思います。

「概説 北海道史」をどんな構成にするか、何巻にするかといったことは、具体的には編さんが始まってから先生方に検討をお願いすることになりますが、せっかくの機会ですのでイメージやアイデアについても併せてご意見をいただければと思います。最後の年表の部分ですが、これも要望にあったもので、直近の現代までを加えて作り直して1冊にするというものです。

なお、前回の懇談会で横井先生から、現代史部分の刊行が途中になっている「北海道教育史」の動向についてご質問をいただいております。編さんを担当している道立教育研究所に問い合わせたところ、現在は北海道150年を記念した子ども向けの歴史ものの刊行を準備しているということで、「北海道教育史」の編さんをどうするかは、それが終わってから検討する、ということでした。教育史の編さんも始まるということになれば、当然、互いに連携・調整して進めなければいけませんので、今後連絡を密にしていきたいと思います。議事1「道史の構成について」の説明は以上です。

## 辻座長

それでは、道史の構成に関しまして、資料1でお示ししました案をたたき台に、ご意見を賜りたいと思います。前回の懇談会では、現代史を中心とすることには肯定的なご意見が多かった一方、「新北海道史」の史観が相当古くなっているため、さらにより古い時代からということを目指すご意見もいただいております。しかしながら、実現できるであろう範囲内で、という制約があるものですから、元々の構想であります1970年以降からもう少し遡った1945年以降の現代史をきちんとした形で作る、またこれとは別に、新たな研究成果を盛り込んで、先史時代からの「概説 北海道史」を道民に理解しやすい形で作る、という案で、今回改めてお示ししているところでございます。率直なご意見、あるいは別の提案でも結構でございますので、ご発言いただきたいと思います。ここからは、自由に発言していただきたいと思います。

## 桑原委員

私は、北海道編の仮称「北海道現代史」の編さん検討案に基本的に賛成いたします。これまで北海道庁並びに北海道は、大正7年の開道50年、そして昭和43年の北海道百年に当たります。記念事業の一環として道史の編さんを実施して参りました。今回も北海道150年の記念事業の一環として「北海道現代史」の編さんに取り組むことは、こうした歴史の編さんという伝統の継承に留まらず、過去の北海道の歴史に対する見直しと反省という点からも極めて意味がある事業であると考えられるわけです。北海道の歴史を考えた場合、明治維新と戦後の改革によって大きく変わったわけで、特に北海道百年以降は、色々な課題が生じて現在に至っているわけで、その辺をきちんと書き残しておくことは大変重要ではないかと私は考える次第です。

2番目に「北海道現代史」の構成についてですが、先ほど事務局から説明がありました検討案では、概説1冊、通史編2冊、資料編3冊に年表という構成となっておりますが、この配分は、もう少し検討した方がいいのではないかと思います。例えば、充実した資料編があれば、場合によっては通史編は1冊でも構わないのではないとも思います。今後、編さん事業が具体化する直前の段階で、再度、何冊にするかを考えればよいと思います。いずれにしても、過去の北海道史編さん事業では、資料編をそれほど重視してこなかった、むしろ通史を書き上げることに力点を置いてきた傾向がございますので、今回の道史編さんでは、その反省を踏まえて資料編の充実を図るべきだと考えます。

3番目に概説の目的ですが、これまで北海道庁・北海道が編さんした3種類の北海道史には、必ず第1冊目に概説という薄い冊子があります。大正期の「北海道史」、昭和11年「新撰北海道史」、昭和43年以降の「新北海道史」、1冊目に必ず概説がありますが、この位置付けがあまり明確でなく、内容は、はっきり言って通史の単なる要約に留まっているようにも見えます。この点を明確にして、内容的に意味のある概説の編さんに取り組むべきではないかと私は思いました。

最後になりますが、前回の第1回懇談会で北海道史研究協議会ほかの文化系歴史系の団体から要望書が出されました。7団体からですね。その要望というのは、先ほど事務局から説明がありましたように、北海道史の全面的見直しをやってほしいというのですが、この要望をどのようにしたらこの編さん事業の中に生かせるか、改めて検討してみる必要があるのではないかと、具体的に考えられるのは、例えば、「概説 北海道史」の中にこれを生かすぐらいしか考えられませんが、そういった方法が可能かどうかということも含めて検討してみる価値があるということです。以上4点を申し上げました。

## 辻座長

どうもありがとうございました。まさに通史編の扱い、それから概説の中身、そして北海道

史研究協議会様ほかからいただいている要望の反映のやり方などについてのご意見であったと思います。

その他ご意見ございませんでしょうか。

#### 坂下委員

前回、70年以降というのを戦後から、場合によっては戦中、戦前まで遡るということで、前回私の方でそういうことを言わせていただきましたが、今回反映していただいて良かったと思っています。それから資料についてですが、戦後は、本当に紙がボロボロで、しかもガリ刷りみたいなものがあって、相当ひどい保存状況にあるのではないかと気になっているので、きちんと形にして残していくことは大事だと思います。最近は全てコンピューターに入っていますが、コンピューターに入れば残るかというところもそういう訳でもないということもありまして、きちんと系統的にピックアップして残しておくのは非常に大事なことだと思います。コンピューター時代だからこそ、従来のやり方というか、本で残していくということは大事なことはないかと思っています。

それから、この現代史と概説、年表はかなり性格も違うものなので、具体的に編集していく場合に、同じ人間がかなり詰めた50年くらいの現代史をやる部分と通史的なものの両方をやるのは、結構辛いのではないかという感じがしてしまっていて、同じ人がやるということであれば、時間的な割り振りをきちんと考えたほうが良いという感じがしています。私がお手伝いするということになりますと、どうしようかという感じもないわけではないので、その辺少し配慮が必要だと思います。以上です。

#### 辻座長

どうもありがとうございます。まさに時間的なことを考えますとマンパワーが必要ですので、内容を含めてどのような分担でやるかという課題もあるというお話と併せまして、資料編については資料が色々散逸している部分、きちっと残っていない資料を今のうちにきちっと整理して今後活用していくことも重要ではないかといったご指摘もあったと思います。

その他ご意見ございませんでしょうか。

#### 横井委員

この全体の構成、検討案は、前回のご提案から色々要望を取り入れて修正されていて、全体として私も賛成したいと思います。先ほど桑原先生から通史編と資料編の割合と言いますか、巻数を見直す余地を残しておいた方が良いとおっしゃられて、そういう可能性もあるかなとは思っています。前回話したことですが、通史編の内容をどのくらいの密度で書くかということですね。通史編をあまり書き込まないで、1945年から50年間ぐらいいを1冊にまとめていくということで良いのであれば1冊で済むかも知れませんが、現代になればなるほど事象が多様になってきて、私の教育の分野でも様々な出来事が起きてますから、それを全部書くのは無理ですが、ある程度の通史編の分量が必要だと思います。それから資料編の方ですが、現代は非常に多くの資料がありますので、かなり精選しないと作るのが難しくなるということ、それから行政資料をどこまで載せるのかということもあると思います。社会・教育・文化のところで行政資料以外の文書を考え出すと非常に膨らんでしまいますので、そこを重視するのか、あるいは狭めて基本的に行政文書的なものを多く載せていくのか、あるいは戦後の前半の方を重視してコンパクトにまとめていくのか、色々検討しなければならないところがあって、それによってこの資料編の作り方が変わってくるかなと思っています。今は、とりあえずこのご提案で良いのではないかと思っています。

あともう1点だけ、先ほどご報告があった北海道教育委員会の「北海道教育史」が、これまで戦後史の部分が書かれてきたり資料編が編まれていますので、教育の部分についてはそこと

の調整で資料編を考えるのが良いのかなと思います。「北海道教育史」に入っているものは道史に載せる必要はないと思いますが、教育史の方は戦後の前半の方で止まっていますので、今回の道史では資料編を一度は独自に考えて、教育との調整を考えるという手順でいくのがいいかと思っています。以上です。

#### 辻座長

どうもありがとうございます。通史編と資料編の関係についてお話がございました。特に資料の扱い方について課題がある。それから現代になればどんどん事象が多様化していく。また、教育との関係につきましては、資料編の扱いの仕方、この辺はやはり私ども道教委と十分連携を取りながら進めていきたいと考えております。

その他ご意見ございませんでしょうか。

#### 山崎委員

検討案のとおり進められるということで私もよろしいかと思いますが、前回から変わったのは1945年から2000年までを対象とするということですが、そこでもう一回整理して欲しいのは、「新北海道史」の1945年から1970年までの間をどう扱うかということです。「新北海道史」の戦後のところは無いものとして書いてしまっているのか、あるいは1945年から1970年まではぎゅっと短くすべきなのか、あるいは別な観点による補足というような形で書いていくのか、色々なアプローチの仕方があると思いますが、ともあれ1945年から1970年までの扱いをどのようにするのか、ある種の原則を作っていただきたいと考えております。

2点目は、これはできればということですが、「概説 北海道史」が出来上がった暁には、これからの時代のことを考えて、是非、「英語版」を作って発信していただきたい。そうしたものが北海道初で出来るとすると他の府県と違った、そしてこの北海道史を生かしていく重要な意義深い発信になると思いますので、そういったことは、多分この150年の節目でしかできないと思いますので、ご検討いただければと思います。以上です。

#### 辻座長

どうもありがとうございます。1945年から1970年のまさに現代史のところの扱いについては、どのように対応するか検討していかなければならないと考えております。また、これから北海道のグローバルな話をしていく際にも、この英語版というのは重要な問題だと思いますので、検討課題に入れていきたいと思っております。

それでは小内委員お願いします。

#### 小内委員

私もこの検討案で基本的には賛成したいと思います。ただ、通史編と資料編のバランスという点では、一般道民の方も親しむということであれば、資料に直接馴染みがあるという人はそう多くはないと思うので、通史編もガイドとしてきちんとあった方がいいのではないかと感じました。お配りいただいた千葉県の資料ですが、たまたまそういうところを抜粋されたからかもしれないですが、通史編がA4、1枚に対して資料編がその2倍の2頁みたいな感じになっているので、頁数にしたら資料編は2倍くらいかなというイメージを持ちました。

それから「概説 北海道史」については、よく分からないところもありますが、単なる要約ではなく、かつ、学術的な最新の成果も入れて書く、市民も親しめるようなというものが、どのくらいのボリュームでできるものなのか予想が付かないところがあって、非常に難しいお仕事になるのではないかと感じますが、その点については、先ほどの事務局のお話では具体的な検討部会ができたところで改めて検討するという解釈でよろしいでしょうか。

## 靄原首席文書専門員

はい。

## 小内委員

分かりました。

## 辻座長

どうもありがとうございます。検討課題は色々ありまして、今回は道史を見ていただく側の立場に立ってということを考えますと、これから色々工夫していく課題もあるなど思っております。その辺りのご意見も伺いながら、様々な事例も含めて検討していきたいと考えております。

それでは小川委員をお願いします。

## 小川委員

今回、資料を拝見して、前回2つの大きな案の提示があったものから、広く現代史を対象にしながら尚かつ通史も見通すということで、そちらに舵を切ったのかなと思います。それから冒頭の副知事のご挨拶の中でも、北海道の姿を見つめ直すという形で「新北海道史」の単純な後継史という形ではなくて、この機会に改めて北海道の姿を見つめ直す、その時に改めて資料編さんからやっていって作るのが「現代史」であって、いわゆる先史時代からの北海道史全体についても新しい研究成果を踏まえて、この機会に捉え直していって、それが多くの道民に共有してもらえるものを作るのが「概説」。概説と言うと、最初に桑原先生もおっしゃられておりましたが、位置付けがよく分からない、かなり薄味とイメージされるところがあるかもしれませんが、今回はむしろ多くの道民に新しい北海道の姿を見つめ直したものをを見ていただく、というようなものを作るのだという形で受け止めさせていただきました。

それから歴史の濃淡をどう書いていくか。先ほど山崎先生の方からもお話がありましたが、例えばアイヌの歴史ということで考えてみた場合、「新北海道史」の戦後の部分はほとんどアイヌのことは書いていないですね。そういったところについては、1945年から1970年の「新北海道史」の成果を膨らませるのか縮めるのかという以前に、一から作っていかねばならないところなので、アイヌの歴史そのものを日本の歴史の中の、例えば社会福祉のところを見たら出てくるといったような存在ではなくて、北海道という社会を作っている構成員として描き直していくことは、道史としては最初の機会になると思います。1945年から1970年について「新北海道史」の記述をどのように生かすのか、あるいは書き直すのかということについては、分野やテーマによって濃淡や比重のかけ方が変わってくるのかなと思いますので、そういったところは次の段階の検討のところで具体的に考えていただければいいのかなと思います。今回はこういった形で基本的にこういった道史を作っていくのだと、その際、「現代史」はこういった視点で捉えていくとか、アイヌ民族の位置付けはこのように考えていくとかというところが出てくればいいのかなと思っています。以上です。

## 辻座長

どうもありがとうございました。

それでは北野委員をお願いします。

## 北野委員

では順番ですので、私も一言申し上げます。基本的に今回示していただきました検討案につきましては、私も賛成でございます。とりわけ大変感心と言いますか評価したいと思いますのは、資料編の充実を図っていくという点ですね。ともすると一般の方々は通史を読んでなんと

なく分かった気がしますけれど、この千葉県の例を見ると非常に分かり易い資料を整理した上で付けていただいているという意味では、この政治、行政、産業、経済、社会、教育、文化それぞれの資料編の充実をしっかりとやっていただければ大変ありがたいと思います。

それと議論の分かれているところがあるかもしれませんが、「概説 北海道史」をどう作るかということはかなり難しいなど、率直なところ思いました。「北海道現代史」を作った上で、さらに「概説 北海道史」、これは私も必要だと思いますが、先ほどお話ありましたとおり、例えば私どもの新聞でも連載しておりますが、アイヌの問題一つ取っても、おそらく「新北海道史」に書かれている内容以上の話がたくさん出てきている。そういう中でここは避けて通れないだろうというのが率直な考え方です。と同時に 2000 年で区切るというのは、それはそれで良いですが、「概説 北海道史」の方も 2000 年という認識でいいでしょうか。そこで 2000 年ぐらいの北海道の大きな動きを考えてみますと、一つは経済で言うと 1997 年の拓銀破綻がございました。この拓銀の破綻は 2000 年以降も大きく影響していますので、2000 年で区切っても若干その後の動きも、とりわけ拓銀の破綻の場合は、その後 5 年、10 年と北海道経済に大きな影響を与えたと思いますので、1997 年の拓銀破綻で影響した 5・6 年後の話、つまり 2000 年を超えた話についても触れていただければ大変ありがたいと思います。

それと同時に、例えば、堀知事が再選されたのは 1999 年だったと思いますが、この辺の道政上の評価をどのようにするのかということもご検討いただければと思います。途中の 2000 年で切るのではなく、例えば掘道政の評価もきちんとしていくというような形で、単純に年月で区切らずに少し糊しろのある構成をお願いしたいと思います。以上です。

#### 辻座長

どうもありがとうございます。

それでは富田委員をお願いします。

#### 富田委員

せっかくの機会なので一言だけ。私も今回示していただいた検討案、これでいいのかなと感じております。冒頭、桑原先生の方で資料編を少し分厚くという話もございました。私も同じような考えでございます。一つこの資料編を作るに当たりまして、目線が道民、一般の方々分かり易く興味があるというような、私は専門ではございませんので難しいことは分かりませんが、一般道民の方が興味を持つということに力点を置いていただければなというところでございます。以上です。

#### 辻座長

どうもありがとうございます。

それでは柴田委員をお願いします。

#### 柴田委員

私も素人なので何とも言えないですが、前回の議論を踏まえて今回の構成案を練られたということについては、私も基本的に賛成といいますか異議はありません。後は、先ほどもお話がありましたように、道民の方々が親しみ易くと言いますか、自分達の北海道の歴史を振り返るといった意味で言えば、概説版の方がどのような形になるのかなということも一道民とすれば楽しみですが、先ほどお話があったように、作業としては非常に難しいのかなと感じております。

それから資料編の関係ですが、我々農業団体なので、農業団体にある資料を特に戦後ですので、我々ご提供できるかなと、そういう役割でここに入っていると思っております。重たいですが、ホクレンの方で来年、再来年に向けて百年史の編さん作業をしている時でもございます



ので、そこら辺とも連携を取りながら、この資料編の充実ということの中で農業団体として貢献できる部分があればということで考えております。以上です。

#### 辻座長

どうもありがとうございました。  
その他ご意見ございませんでしょうか。

#### 横井委員

資料編について、もう一言なんですけど、この検討案では現代資料ほど散逸しやすいということで、今しかできない資料収集と書かれていますけど、資料収集を積極的にやっていくことは非常に重要なことだと思いますが、それを道立文書館かどこかに保管していくことまで含んでいるということですか。ある場所を見つけて、ここにありますがということを確認して、その一部を抜き出して資料編に入れるぐらいなのか、複写でもして保存していくところまで含まれているのか、そこをお聞きしたい。

#### 鶴原首席文書専門員

道立文書館では前回の「新北海道史」の資料も全部引き取って閲覧資料に供しています。同じように、今回も調査に行くと基本的には複写を取るような形だと思います。寄贈された物もあるでしょうが複写した物がかなり多くなると思います。それについては所蔵者に対して使い終わった後で文書館に入れて、どういった利用の仕方が許されるか許可を得た上で、永続的に複写物を利用できるような形になっていくと思います。

#### 横井委員

分かりました。是非それを進めて確実にやっていただきたいと、様々な資料から抜き出して資料編を充実させることは、道民の方々が読む上で非常に重要だと思いますが、全ての資料を入れることはできませんので、資料の在りかが分かっている確実に保存されていることが重要で、今回の道史編さんというのは、道史を書くだけではなく資料保存を重視していただければと思います。

#### 辻座長

どうもありがとうございました。  
その他ご意見ございませんでしょうか。

(意見等なし)

概ね原案に賛同していただける意見が多かったと思います。しかし、様々なご指摘もございまして、今回資料編に力を入れるその扱いをどのようにしていくか、また、その記述の方法の課題、それから概説の扱いも考え方によってかなり違うということもあります。また、今後は判断の難しい作業、どこをどのように入れていくか、各論になりますと相当違うこともあるのかなど、その辺も含めた課題につきましては、次回検討していただければと思っておりますし、編集の際に検討できる部分もあるのかなど思っております。

概ね原案に賛同していただける意見が多かったということで、この「構成」についてはこういった方向で進めることでよろしいでしょうか。

#### 各委員

(異議なしの様子)

## 辻座長

今回いただいたご意見、ご要望は十分検討して参りたいと思っております。  
事務局から補足することがあればお願いします。

## 鶴原首席文書専門員

先ほど桑原先生からご指摘がありました通史編の巻数の問題ですが、実際に編さんが始まりますと、編目構成ですとか資料の集まり具合など、具体的に検討した時には当初の巻数より多い、あるいは少ないといったようなこともあり得るかと思っておりますので、そうしたことに対応できるように、例えば「編さん大綱」第4条の巻数のところですが、「通史編2巻、資料編3巻程度」といった言葉を入れてもいいのかなど、その辺り検討していきたいと思っております。

## 辻座長

いずれにいたしましても今回いただいたご意見を参考にいたしまして、実際の編さんの打ち合わせでも学識経験者の先生方に具体的にご検討いただくことになるかと思っております。

それでは次の議事に入りたいと思っております。議事2の「道史編さん大綱（素案）について」に移ります。前回の懇談会では要素だけしかお示しできませんでしたが、今回は文章化しております。大綱の素案につきまして事務局から説明いたします。

## 鶴原首席文書専門員

資料3をご覧ください。前回は基本フレームでしたが、今回は文章化した素案ということになっております。第2条「道史編さんの目的」のところでは、前回は「新北海道史」の後継史という項目を入れておりましたが、まるごと削っております。また、対象時期を限定するのであれば「この時代の歴史」というような何らかの表現が必要になるのですが、現代史を中心とする一方で、概説ではありますが、先史時代からの北海道史の書き改めということも力を入れて扱うということで、時代は限定せずに、「郷土の歴史」という大きなくくりで始めております。

第3条「道史編さんの方針」では、資料編も作る現代史と、先史からを対象とする概説、2種類のタイプの違う編さんとなるため、現代史を念頭にした項目として1～4、そして5で別に作る概説について言及し、6は共通ということになります。5を新たに加えましたが、ほかは前回の項目をそのまま文章化しています。

第4条「道史の構成」では、第二次大戦以後を対象とする現代史、通史編2巻と資料編3巻、これは巻数を示しています。他に、北海道史全体を対象とする概説書と年表を作る、という表現にしております。先ほども触れましたが、実際に編さんが始まってからの巻数の見直しということに対応する方法として、「程度」という言葉を巻数の後ろに入れることもあろうかと思っております。

第5条「道史編さんの期間」は来年度から10年間を目途。次の頁の第6条「道史編さんの組織」は、前回は組織図で示していたところです。前回「各巻担当者会」と言っていた実務組織を、委員の皆さん前回は「部会」という表現が使われておりしたので、分かりやすく「部会」に今回改めております。いくつの部会が必要となるか、巻ごとがいいのかどうかは、別途ご検討いただくこととなりますので、大綱の中では部会を置くということに止めたいと思っております。

第7条「普及及び広報」では、前回、機関誌の刊行のご要望がありましたので、編さん状況の他に「調査研究の成果」という言葉も加えております。ただ紙媒体での刊行については、経費や体制の面でまだ手探りの状態ですので、見通しが付いた時点で改めて検討することとしまして、大綱の中では、ホームページでも対応可能な「周知公開」という表現にしております。第8条「事務処理」は前回のとおりで。編さん大綱素案についての説明は以上です。

## 辻座長

それでは、皆様からのご意見を賜りたいと思います。資料3について、ご意見、ご質問、お気づきの点などございましたら、ご自由にご発言いただければと思います。

先ほどの「道史の構成」の中でも様々なご意見を伺っております。例えば資料編3巻という案にしておりますが、先ほど事務局からの説明でも「程度」という扱いにしておいた方が良くのではないかとということもありますし、第3条の「道史編さんの方針」では新たに1項目付けさせていただいたということもありますが、こうした点も含めてご意見をいただければと思います。

(意見等なし)

よろしいでしょうか。それでは、次回はもう少し整理した形でこの内容をお示ししたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

全体を通して、付け加えたいご意見や新たなご意見などがありましたらご発言いただければと思います。

## 横井委員

「大綱」については、基本的にこれでいいと思っておりますが、専門委員と調査執筆委員、これが実働部隊というか最も重要になるわけですが、どれぐらいの人数をここにもってこれるのかということが一番重要で、その人数や体制については、ここではあまり議論することにはならないのかもしれませんが、ここの充実を図っていただきたいと、このタイミングでこういうことを要望するのがいいのかどうか、どのタイミングで言うのがいいのか分かりませんが、前回の会議でも言ったように、教育という分野一つとっても非常に幅が広いので、研究者も専門分化しているので人数が必要になってくると思います。それから、先ほど資料編のところで、第3巻は「社会・教育・文化」となっていますが、県史では「教育・文化」がセットになっていることが多く、「芸術」だとセットにできるのかもしれませんが、社会的な事象も「文化」ということにしだすと、どこが「社会・教育・文化」の切れ目なのか難しいところがあって、「文化」を独立させて部会を作ってまとめていただくとなると、また執筆者等が必要になってきますので、専門委員と調査執筆委員を確保することが非常に重要で、そこを是非充実させていただくようお願いしたいということです。

## 辻座長

どうもありがとうございます。

その他ご意見ございませんでしょうか。

(意見等なし)

只今、横井先生からお話があった件につきましても、どこまで具体的な説明になるかということは別にいたしまして、改めて内容をお示しできればと思っております。

次回は、今回のご意見を基に「道史編さん大綱」の原案をお示ししたいと思います。それでまた内容を深めていきたいと考えております。それでは、これをもちまして、第2回道史編さんに関する有識者懇談会を閉会いたします。次回の日程につきましては、11月頃を予定しております。もう少し近くなりましたら、御案内させていただきたいと思っております。

本日は長時間に渡りありがとうございました。